成り立たせることができたと思った。
すでに過渡期を歩み始めたわたしたちは、これから、もっと多くの共同と試行錯誤を重ねなければならないだろう。いまという時代の風景が垣間見えた、今年の集いになったと思う。
（やまもと・ただひと／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）

山の手空襲
――聞くことの大切さ

岡本 和子

私は長くこの青山の地に住んでいます。父も祖父も曽祖父も同じ青山に住んでいました。物心ついた頃の青山は穏やかな街でした。今の青山や原宿の様に華やかな街では無く、お店はユニオンチャーチやオリエンタルバザー、キディランドが有った位です。
家の庭には柿の木が有り、多くの花々も咲いて、縁の下からグニャッとしたガラス瓶を見付けるまでは悲惨な戦争のことを知ることも無く過ごして来ました。グニャリとした空き瓶を見た時、両親から聞いていた戦争の話とガラス瓶が繋がりました。
ガラス瓶がどの位の温度でグニャリとなるのか調べた所、1300～1600℃で瓶は熔けるとの事でした。5月25日の空襲では沢山の焼夷弾が落とされ、辺りは1000℃以上の高温になっていたことと思います。家族で戦争の被害にあったのは、父方の祖父と3人の妹達でした。一番下の妹は逃げている途中で仏壇に位牌を置いてきたことに気付き、急いで家に戻りそれを抱えて直ぐに父親達の後を追ったようですが、その姿はどこにも無かったそうです。叔母は側にいた女の人と防火用水の水をかけあい、命が助かったそうです。
他の場所に居て助かった私の父は、家族の遺体を捜して歩き回ったそうですが、どの遺体も真っ黒焦げで誰が誰だか分からない状態だったようです。何年か経ってその辺りを歩いた時、穴は埋められ、何事も無かったかのように家が建ち並んでいたそうです。
大人になってこの辺りの悲惨な戦争の話を聞くたび、そこに居た人々の恐怖や無念の思いが、自分のことのように感じられるようになりました。会ったことの無い祖父や叔母達の逃げ惑う姿が浮かび、遣り切れない気持ちになります。
祖父は若い頃、海軍の軍人でした。山の手大空襲の業火の中で、祖父は何を思っただろうかと考えます。地獄のような猛火の中では、そのようなことを考える余裕など無かったかも知れませんが……。戦争が無かったら祖父や叔母達は生きていて私と会い、どう思いどんな事を言ってくれただろうか考えることが有ります。
戦争が終わることの無いこの世界を見ていると、心から平和の尊さ大切さを感じます。誰にも未来が有り生きる権利が有ります。思い半ば志半ばで亡くなった人々。戦争はその全てを奪い取ってしまうのです。
私の名前は和子と言います。子供の頃「何故私の名前は和子と言うのか」と父に問うたことが有ります。父は「戦争が終わり、平和の世の中に生まれた子だから」と答えてくれました。自分の名前に対する意識が変わりました。平和の子で有る私は平和を繋げる人で有りたいと願ってます。
皆が不幸になる戦争は絶対にやってはいけないものです。
終戦から80年経った今、ネットが普及し多くの若い人達がその情報を丸呑みし、他国の人々を攻撃するような言葉を発しているのを聞くたび、私はどう行動したら良いのか悩みます。私は戦争を体験してませんが、体験した人から直に聞いた者として、この悲惨な戦争の話を若い人達にしっかり伝えて行きたいと思うのです。
（おかもと・かずこ／山の手空襲を語りつぐ集い実行委員）